

FNCA 2013年
放射線安全・廃棄物管理プロジェクトワークショップ
議事録

2013年9月10日～13日
モンゴル、ウランバートル

1) ワークショップ概要

i) 期間	2013年9月10日～13日
ii) 場所	モンゴル、ウランバートル
iii) 主催	文部科学省（日本） モンゴル原子力庁
iv) 参加者	11カ国より16名（オーストラリア、バングラデシュ、中国、インドネシア、日本、カザフスタン、マレーシア、モンゴル、フィリピン、タイ、ベトナム）
v) プログラム	添付1

2) プログラム

FNCA 放射線安全・廃棄物管理ワークショップが2013年9月10日～13日にかけてモンゴルのウランバートルで開催された。このワークショップは日本の文部科学省とモンゴル原子力庁が共同で開催した。

FNCA 参加11カ国(オーストラリア、バングラデシュ、中国、インドネシア、日本、カザフスタン、マレーシア、モンゴル、フィリピン、タイ、ベトナム)から16名の放射線安全・廃棄物管理分野の政策、規制、運転そして研究開発に携わる代表者がワークショップに出席した。プログラムは添付1を参照。

[開会セッション]

モンゴル国立大学原子力研究センター長でFNCAコーディネーターの Suren Davaa 氏 と、モンゴル原子力庁原子力放射線規制局局長の GUN-AAJAV Manlaijav 氏より開会の挨拶があった。両氏は、参加者を歓迎し、海外参加者とモンゴルの専門家が、本ワークショップを通して原子力安全やモニタリング、そして放射性廃棄物管理に関する有益な情報や知識を得ることを期待した。東京大学の小佐古敏荘教授はモンゴル原子力庁への深謝の意を表名し、放射線安全・廃棄物管理分野における参加国の円滑なコミュニケーションを望んだ。また、小佐古教授より、放射線や放射性物質、また原子力材料の利用においては、それぞれの利点だけではなくリスクマネジメントについても考慮することの重要性が指摘された。その後参加者による自己紹介があった。参加者リストは、添付2を参照。

[セッション1] カントリーレポート発表 – 公衆被ばく（平常時と緊急時） / 放射線安全に関する統合化報告書草案の改定–

参加 11 ヶ国より平常時と緊急時の公衆被ばくに関する発表が行われた。特に規制体系、放射線緊急時、さらに各国内の放射線モニタリングシステム分野における最新情報が 2010 年にまとめられた統合化報告書案に追加された。各国の報告は添付 3 を参照。

[セッション2] 放射線安全に関する統合化報告書に関するまとめと討議

事務局より各国の最新の原稿を統合した報告書案が提示された。この最新の報告書案を確認および評価するため、参加国は 3 つのグループに分けられ、各グループはそれぞれの報告書を比較しながら強化すべき点について話し合った。その後、討議結果について各グループから報告があり、2013 年の 10 月末までに報告書の最終案を完成させることで合意した。

[セッション3] 研究施設における放射性廃棄物処理および処分の現状

参加 11 ヶ国より、研究施設における放射性廃棄物処理および処分について発表があった。各国のサマリーは添付 3 を参照。

[セッション4] 中央地質研究所へのテクニカルビジット/FNCA 参加国の原子力施設のさらなる向上へ向けた討議

2013 年 9 月 11 日の午後に、州立中央地質研究所(CGL)へのテクニカルビジットが行われた。CGL は鉍物分析技術や環境試験に関する幅広いサービスを提供する先進的な機関である。主な業務は、鉍物資源や石炭の分析、関連材料や認証標準物質の製造、環境テスト、構成材料の調査や鉍物加工技術試験等である。始めに、FNCA の参加者は国内外の専門機関や認定機関とのさまざまな協力を含む CGL の活動について説明を受けた。次に、参加者はさまざまな施設や実験室を回り、最新の装置や CGL の有能な職員により行われている分析手段について視察し討議した。その後、円卓討議が行われ、参加者は CGL を視察した感想や CGL の活動をさらに支援するための提案について意見交換を行った。CGL は高い技能を持った職員を有し、実験室では最新の装置や優れた活動が行われているという意見で一致した。日本の小佐古教授は、持続的な人材育成プログラムを開発し、活動を強化するため一般市民や政府の上層部とのコミュニケーションを発展させることが CGL にとって重要であると提案した。

[オープンセミナー] FNCA 参加国における放射線安全管理および RI 分析

放射線安全管理および RI 分析に関するオープンセミナーが 9 月 12 日に開催された。現地の大学の学生や講師、原子力関連機関の研究者や放射線安全検査官等、約 60 名が参加した。Suren Davaa 氏は開会挨拶において全ての参加者を歓迎し、本セミナーが聴講者にとって有益になることを望んだ。小佐古敏荘教授からも歓迎の挨拶があり、モンゴル国立大学とモンゴル原子力庁への深謝の意が表明された。両氏からはまた、原子力利用の推進へ向けた若い世代への期待が示された。次に小佐古教授より、FNCA 放射線安全・廃棄物管理プロジェクトの概要と活動経緯について説明があった。その後、研究施設や原子力発電所における放射線安全管理の現状や人材育成についてタイ、カザフスタン、日本からそれぞれ発表があった。続いてモンゴル、マレーシア、ベトナム

ムから研究機関における RI 分析の現状について発表があり、その後、放射線安全管理や RS&RWM 分野の人材育成において FNCA 参加国が直面している課題について討議を行った。午後のセッションでは、始めに小佐古教授より、放射線安全および防護の重要性に関する発表があった。オーストラリアの Lynn Tan 氏からは国際放射線防護委員会(ICRP)の勧告や IAEA 安全基準について説明があった。モンゴルとインドネシアからは NORM の管理等に関する発表があった。バングラデシュとフィリピンからは自国における RI の医学利用について報告があった。その後開催された FNCA 参加国における放射線安全の技術支援の可能性に関するパネル討議では、小佐古教授とモンゴル原子力庁放射線管理・校正実験室室長の Orlokh DORJKHAIDAV 氏が進行を行った。最後に、小佐古教授、Orlokh 氏、そしてモンゴル原子力庁規制関連業務長官アドバイザーの Oyuntulkuur Navaangalsan 氏が閉会の辞を述べた。オープンセミナーのサマリーは添付 5 を参照。

[セッション 5] まとめの討議－ワークショップサマリーおよびプロジェクト活動評価(2011-2013)－

参加者は 2011 年から 2013 年の第 4 フェーズのプロジェクト活動を振り返り、放射線安全に関する統合化報告書の完成とニュースレターの出版へ向け、今後も協力して取り組むことを確認した。

また第 5 フェーズで討議すべき課題についても意見交換があり、緊急時対応や対策、放射性廃棄物処分、廃炉措置、未使用放射線源の管理、輸送、使用済み線源の貯蔵、ウラン鉱山、NORM 廃棄物などが提案された。小佐古教授により参加者の意見がまとめられ、次期フェーズのテーマとして「緊急時の一般公衆の放射線安全の向上と、放射性廃棄物処理の状況」が提案され合意された。また次のワークショップの開催国としてカザフスタンが提案された。最後に事務局より本ワークショップの議事録案が提案され、修正の後に承認された。

[閉会セッション]

GUN-AAJAV Manlaijav 氏と小佐古敏荘教授から挨拶があり、ワークショップは閉会した。

添付

添付 1－ プログラム

添付 2－ 参加者リスト

添付 3－ セッションサマリー

添付 4－ オープンセミナーサマリー